

## 再びドイツでの生活

平井信義

霧の立ちこめている朝が続く二月は、八時だというのにまだ暗い。部屋の電気を消して廊下に出ると、足さぐりで歩かなければならないほどである。隣の部屋は森閑としている。台所には水の落ちる音もしない。ベッカーばあさんは、まだ寝ているのである。明け方に遅い朝のひと時を、床の中で十分に楽しんでいられるらしい。

廊下は十歩も歩けば入口のドアにつきあたる。手さぐりで把手を求めてそれを廻すとがちやがちやと鳴る。それは毎朝のことなのだが、その度に、何故か私ははっとする。ベッカーさんの睡りをさましては悪いという気が、私をはっとさせられるらしい。

ドアは音もなく階段の方に向ってあく。しかしこのドアだけは、閉めないときまらない。ところが、閉めてしまうとやはりあかない

のである。錠がおりてしまうのである。そのガチャリという音をきく度に、私はもう一度はっとする。もうこの扉はあかないのだ。取って返すことの出来ないのだというような気持がする。この気持から開放されたのは、十カ月の留学を終えてドイツを去ろうとする頃であった。

階段の降り口に押しボタンがついている。それを押すと、階段を照らす電気がともるのである。コの字に曲った階段の、それぞれの段についている真鍮のとめ金が鈍く照り返す。その光を目差しに受けながら降りていくのであるが、三分間だなと思うと気ぜわしい。三分たつと自動的に電気が消えてしまうのである。勿論、三分あれば、どんな年寄りであっても悠々降りることが出来る。しかし、何

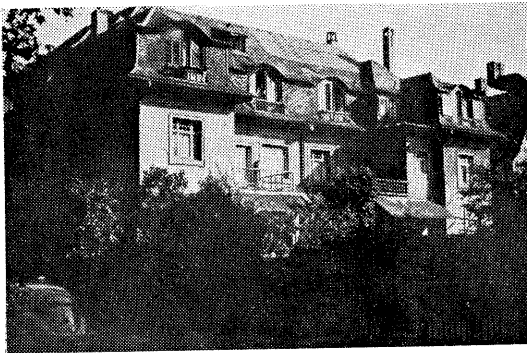


となく気  
ぜわしい  
のは、こ  
うした生  
活にまだ  
慣れてい  
ないため  
なのであ  
ろうか。

私の性質のためなのであろうか。あるいは三分間という時間の故であらうか。

内玄関の戸口に立つ。この把手は、二重に鍵がかかっている。時ならそれを廻しただけであくが、鍵のかかっている時には二回廻さないとあかない。勿論、いずれにしても外からはあかないのであるが、この扉は鍵をかけた上に鍵をかけるような仕組みになっている。その仕組みが完全におこなわれていると、外からあける鍵を持つていても、あけることは出来ない。何と念の入ったことだろう。面倒なことだろう。私はいつもそれが煩鎖でならない。時間が無いときなどは怒りさえも発することがあった。何だってこんなに鍵をかけやがるのだと、つぶやいたこともあった。

鍵を使う戸口はその玄関の扉で終るのではない。もう一つ、門が

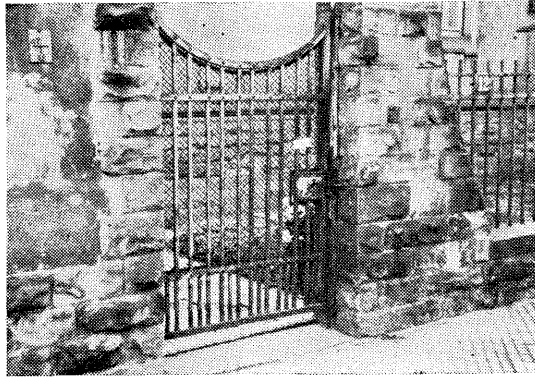


あるのである。石畳を七・八歩あるいたところに門があつて、鉄の格子にとりつけられた鍵は、内側からなら把手を下に降せばあくようになっている。しかし、それがガチャンと私の背後でしまつてしまつと、もはや、押しても叩いてもあかない。鉄の格子がわずかにきしむ音だけが、あざ笑うようだ。しまつた時に私はまたハツとする。そして、右のポケットに手をあてがうのである。

そのポケットの中に、確かに鍵が入っているはずである。それが確かめられれば、初めて安堵する。そして、こつこつと大学へ向けての足音を舗道に響かせるのである。ところがポケットに鍵の鳴る音がきこえなかつたらみじめだ。私はかあつとのぼせてしまう。自分一人では我が憩いの部屋があるこの家に入れないのだ。

自分の部屋・二階の入口・玄関、そして鉄の門口、それぞれの鍵を渡されて、下宿が決つたのであるが、鍵を使いなれな

私は、よく鑰にはまったその鍵束を、部屋の机の上におき忘れて鉄門を出てしまうのであった。鉄門を出てしまつて鍵のないことに気付いても、もはやどうにもならない。鉄門の脇にある呼鈴のボタンをおして、ベッカーさんを起きなければならぬのである。大学



から帰つて来た時に呼鈴をならしてもよいのであるが、もしベッカーさんが家にいなければ、金輪際あかないのである。家の周囲をうろついているか、どこかにたむろしている、ベッカーさんが帰る頃を待っていないければならない。そんなことを三度も続けたことがあった。

それに懲りて、門を出てすぐに気付いた時には、遠慮なくベッカーさんのまどろみをさますことにした。呼鈴を押す。しかし、なかなか反応がないのである。いつまでたつても反応がないのである。待つ身には一分も長く感ずる。しかも二月の戸外は、零下十度前後であるから、外套をし

っかり着けていても、寒さは骨身にしみ、足を凍らせるのである。再び呼鈴をならす。寢床から起上つてナイトガウンをかけ、不精々々に自分の部屋のドアの鍵をガシャガシャ言わせているベッカーさんの姿が想像される。

しばらくして、玄関上の小窓があいて、ベッカーさんの目がのぞく。「Wer ist da? (ヴェア・イスト・ダー?)」——半ば怒つたような牙がるような声が強く鼓膜に響いてくる。Wer ist daを訳するとどなたですか?ともなるが「誰だっ!」を訳したつて一向差支えない。私にはむしろ「誰だっ!」という感じに受け取れてしまう。「私ですよ、平井博士です。(ドイツでは自分の名前を言うときにも、称号をつける) 鍵を忘れたのです」——つい哀願するような声になる。しかし、その声は静まり返つたこの舗道のそのあたりに凍えついたように響き迷っている。

俄かに、鉄門が「ジジー、ジジー」と鳴り始める。電気仕掛けで錠前がはずれている音である。その時に力ずくで押せば、鉄門は開いてくれる。しかし、鳴り止んでからはびくともしなくなるから、急いで押さなければならぬ。私の心もせく。

鉄門を通過しても、玄関の戸口で再び「ジジー」という音待っていないことはならない。あるいは、玄関の扉にいきつく前に、すでに鳴っていることがある。そのようなときは一層気ぜわしい。しかし、文句をいっているところではない。扉を押すことを実行しなけ

ればならないのである。

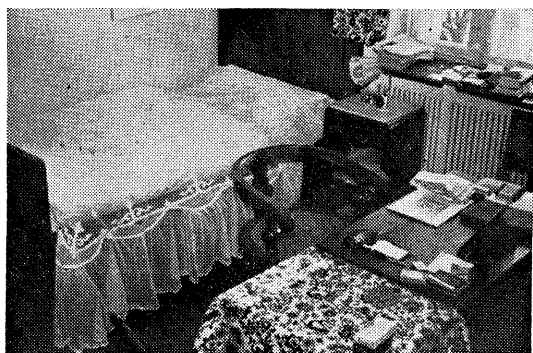
階段を二段ずつかけ上る。すでにベッカーさんが電灯のボタンを押してくれている。三分間のともり火であるという気と、すでに大学への時間が遅れているという焦りが、私の足をせかせるのである。

二階の戸口は半開きになっていた。ベッカーさんがあけておいてくれたのである。そして、ベッカーさんはすでに寝床へ戻っていたのである。私は彼女の戸口を通りざま「どうもすみません」と声をかけたが、返事がない。ベッカーさんは蒲団にもぐってしまったのであろう。私の声のみが廊下に籠っていた。

私の部屋の鍵は、ベッカーさんの部屋の向いに掛ける場所がきまっている。しかし、鍵を忘れるような朝は、部屋の内側に差し込んだままになっている。私は戸をあけて、再び電気スイッチを下す。

ぱっと照らし出された机の上に、私の鍵の束は、厳然とのっている。私はくずれるように椅子に坐って、しばらくの間、その鍵の束を見詰めていた。

友人のヘーベルス君の家を訪ねたとき、彼の二年生になるクリストフが「先生がドイツに来て、何が一番困りましたか」とたずねたのに対し、私は即座に「鍵です。鍵を使う生活です」と答えたことを思いだす。クリストフは、「何故？」ときき返した。「だって、私も日本の生活では、こんなに鍵を使わないもの」と私が言うところとして鍵を使わないの、それで泥棒が入らないの？」と彼は目を丸



くしている。

「そりゃ、泥棒が入るさ？」

「じゃあ、なぜ鍵を使わないの？」

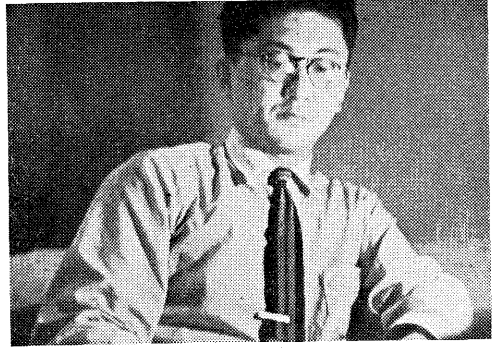
私には、適当な答えがみつからなかった。困ったようにしていると、ヘーベルス君が、

「クリストフは、是非一度日本へいきたいといっているのですよ」と、とりなすようにいってく

れた。

「僕、日本へいくときには、鍵と錠前とを持っていくよ」と、クリストフは、なおも鍵のことにこだわっていた。

こうした鍵は、子どもたちには渡されていない。遊びに夢中になって落ちたりなくなったりするおそれがあるからであろう。幼稚園や学校から子どもが帰ってくると、門の脇にあるボタンを押して「ピピー」という音待つののである。従って、その時間には母親または家人が家にいなければならない。もし、何かの用事があって無人の時



は、「ビビー」と鳴らない門の前立って、子どもたちは寒さを身に受けなければならぬのである。寒さは、子どもにとっても遠慮なく込み込む。そんなとき子どもたちはどこかに寄り道をする恐れがある。殊にドイツには、働いている母親が多いから、子どもを一人で帰すことが出来ない。そこで、保育所(保育所もキンダーガルテンという)とかホルト(放課後学校)の組織を利用するわけである。そうした組織は、市または州の政治が子どもを守るためにしっかりと作っている。しかし、鍵を使う生活をしてみて私に感ぜられたのは「家」というものに対する感じのちがいである。日本の子どもたちは、あるかなしかの門をくぐり、玄関の戸をガラッとあければ、そこに母親の顔が待っているのを見つめるであろう。母親の顔がない時には、「お母さん、唯今！」を大きな声で叫びさえすれば、母親が家にいる限りは、どこからか「お帰り」ということばがかかるであろう。「at home」とはまさにこのような瞬間を言いたいことばである。「唯今！」「お

帰り」の会話は、欧米のことばに翻訳することが出来ない。この会話の持つ味は、家族制度が変わっても、国家の形が変わっても、残しておきたいものだと思う。

六年前、シドニーでおこなわれた「精神衛生」の会議でも、子どもが幼稚園・学校から帰って来たときの受入れ態勢についての論議があった。帰宅した時に、家族の誰かが、殊に母親が迎えてくれない時の子どもの中には、傷が大きいことが言われた。そして迎えることが出来ない家庭に対して、どのような対策が必要かということが、話し合われたのである。

こうして、ドイツでの生活を経験してみると、家庭とか、その中で営まれる親子関係とかに、家屋の造りであるとか、あるいはその運営の仕方が、大きな力を持っていることに気付いた。こうした問題は、実は文化人類学者たちが研究の歩みを進めているのであるが、「鍵」一つにしても、子どもの心にかなり大きな影響を与えていることに気付いたのである。

ドイツの二月は、寒さの厳しい季節である。大学へいく十五分の間を、私は一と息に行きつくことが出来ず、耳や手足のこごえをほぐすために、路傍の郵便局に入って、その暖房に親しんだのを今もなお思い起す。それとともに、鉄門の前に立って、家の中からの反応を待っているドイツの子どもたちの姿も、脳裏からにじみ出るように、眼底にうつり映えるのである。